國語

第六学年 上

廣島高師 歳寒書屋

T1A7
1K7
2

50321

教科書文庫

5
810
34-1948
01304
49592

國語

第六学年

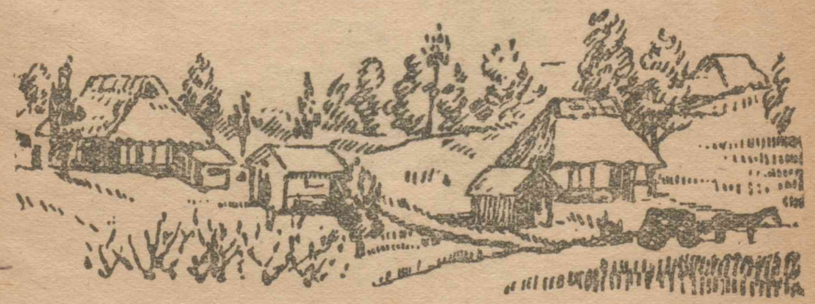
上

中央図書館

広島大学図書
0130449592

もくろく

一　しずかな午前……四
二　眞理……八
　知識と迷信
　ガリレオ
三　みどりの野……十七
四　ホートン風景……二十六
五　電話……三十七

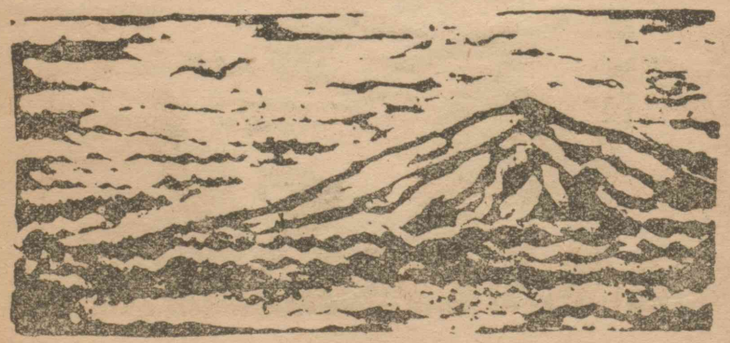


六　そよ風……四十六
　土
　チューリップ
　しか
　きり
　短日
　わらいの歌
　牧場
　わたしの心はにじを見るとおどる
七　ある画像……五十三

一　しずかな午前

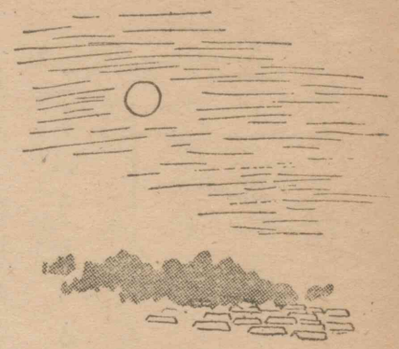
ごらん、まだこのかれ木のままの、高いけやきのこずえの方を。
そのこずえの、細い、細い小枝のあみ目の先にも、
はやふっくらと、季節の命はわきあがって、
まるで、息をこらしてしずかにしている、
子どもたちのむれのように。
その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の

めのむれは、
おたがいにひじをつつきあって、ことばのないかれらのことばで、なにごとか、
ささやきかわしているけはい。
春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目もようにもちらちらとして、
あさい水には、あしのめがすくすくと、
するどい角をのぞかせた。
長くかなしみにしずんだものにも、
春は、希望の帰ってくるとき。
新しい勇氣や空想をもって、
春は、また、楽しい船出のほぬのを、高



くかかげる季節。
ひばりやつばめも、やがて、遠い國から
ここに帰って來て、
私たちの頭上にとびかい、歌うだろう。
すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、
たけのこや、
ちょうや、はち、へびや、とかげや、青
がえる。
やがて、かれらもせいぞろいして、かげ
ろうのたいまつをたいて、おしよせて來る。
ああ、そのさかんな春のきざしは、よも
にあらわれて、

目に見えぬかすみのようにたなびいている、のどかな午前。
どこともしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いて
いるからすの声も、
ほんとうにのんびりとして、ゆめのように、眞理のように、
白雲をかたにまとった小山をめぐって、聞えてくる。
ああ、季節のこういうのどかなとき、
こういうしずかな午前にあって考える、
——人生よ、長くそこにあれ。



二　眞理

知識と迷信

知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、考えたり、調べたりして、しだいにましていく。一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、また、種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。そうして、これをいくどもくり返してたしかめ、す

でに知ったことを材料として、考えをおし進め、種々のことがらの関係を明らかにして、きまった法則を知る。

いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。たとえば、花のおしべとめしべとの関係についていうと、おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、その実験を重ね、かふんがめしべにつくときはよくみのるが、つかないときはみのらないことを、知るようなものである。

知識が開けず、科学の進まないところには、迷信が行われる。むかしは、星を見て世の中がみだれるといったり、てんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったり、あるいは、き

つねがつくとか、からすの鳴き声がわるいから不幸があるなどといった。

今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。たとえば、移轉をするのに、方角がよいとかわるいとかいい、名まえの字画を数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、生まれた年によって、その人の性質や運命をきめたりしている。しかし、よいといった方角へ移って困った人もあれば、わるいといった方角へこして、つごうのよくなった人もある。同じ名まえの人も世の中には多いが、ある人は、幸福なくらしをし、ある人は、たいへん不幸になっている。漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまったくあてはまらぬことは、いうまでもない。

日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、これらの人

がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。このように、道理にあわないことを信ずるのを、迷信という。

一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、原因と結果との関係もないのに、一つのことは他のことの原因であると、信ずるのである。

原因・結果の関係の簡單なものは、普通の知識によって知られ、むずかしいものは、科学的研究によって調べられる。もとより世の中には、科学的研究によっても、まだ知られていないことはたくさんあるが、それは、学者がいろいろに考えて、原因と結果との関係を調べきわめている。

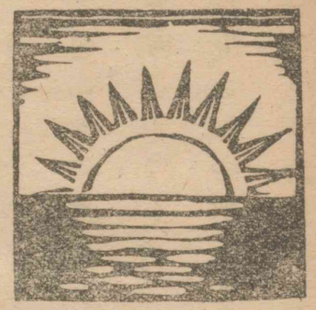
よいことやわるいこと、まっすぐなことや曲がったことは、知識をもととして考えなければならない。そうして、人は、道

理によって動かなければならない。知識によらず道理によらず、いたずらに理由のないことを信ずる迷信は、今日、世の中にどれほど害をなしているかしれない。

知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったくとり去ってしまうようになれば、日本の國は、今日よりまだまだ進むことであろう。

ガリレオ

朝になると、日は東の空からのぼり、夕がたになると、西の空にしずみます。月も、東の空から西の空に向かって動きます。地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。



こういうぶな考えかたがもとになって、東洋でも西洋でも、天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

しかし、この天動説では、どうしてもかたづかないようなことが、目についてきたのです。熱心な学者が、だんだんそれを発見しました。

火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、また、地球もまるい形をしたもので、火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということもわかりました。つまり、天動説とは反対に、地動説が出てきました。これを最初にいいだ

したのは、十六世紀の中ごろに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。

しばらくして、ドイツ人でケプラーという人が出ました。この人は、すぐれた数学者で、また熱心な天文学者でした。いっしんに観察したり研究したりして、そういう星――これをわく星といいますが――の空にえがく道は、だえん形であって、太陽はその焦点の一つにいるものだ、ということを発見しました。

そのケプラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。わかいころからいろいろな発見や発明をしました。自分で望遠鏡を組みたてて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、コペルニクスのいったとおり、天は動くものではない、地球が動くのだということを、

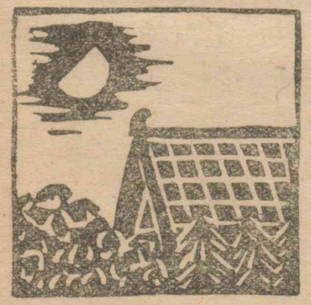
明らかにしました。地は動くといっても、それは一種ではありません。自轉といって、一晝夜に一どずつ、自分で西から東へ一回轉します。また、公轉といって、自轉をしながら、だえん形のきまった輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、ガリレオを呼びだし、その説を人に教えてはならない、といいました。ガリレオも、十三年ばかりは、だまって研究を続けていましたが、だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

そのため、ガリレオは、ローマに呼びだされて、自分でも信

じてはならぬ、人にも説いてはならぬ　といわれました。ガリレオは、年をとってもいたし、めくらにもなりかけていたので、やむを得ず自分の説はあやまりであったということにして、ゆるしてもらいました。

では　ガリレオは、はく害のため、考えをかえてしまったのかというと、そんなことはありませんでした。「やはり地球はまわる」と信じて、死ぬまで真理を求めていたのです。



三　みどりの野

デンマルクは、みどりの牧場と、もみと、しらかばの森林と、近海の漁場のほかには、鉱山があるのでもなく、いい港があるのでもなく、わが九州ほどの本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

美しいおとぎばなしを、世界の子どもたちにおくった、アンデルセンの生まれた國であります。

世界の樂園といわれるこの國も、千八百六十四年に、ドイツ・オーストリアニ國との戰いに敗れ、賠償として、シュレスウィヒとホルスタインという、作物のよくできる二州をとられまし

た。もともとせまい、小さな國ですのに、そのもっともよい土地を失いました。ですから、いかにして、國運をもとどおりにするか、これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、もっとも大きな問題でありました。

戰いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。たとえ戰いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。國のおこるかほろびるかは、このときにさだまり、この苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげて、さかえるのであります。

このとき、希望をいだいてたちあがったひとりの軍人がありました。戰場から帰ったダルガスです。かれは、その胸に國運

回復の計画をたて、その顔にほおえみをたたえて、つるぎで失ったものを、すきでとり返そうと決心したのです。

ダルガスは、戰いの間、橋をかけたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、こんどは、のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戰い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。ダルガスは、とおりいっぺんの空想家ではありません。かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。ユートランドは、デンマルクの半分以上もあって、その三分の一以上が、作物のできない土地であります。これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかあ

りません。その第一は水で、その第二は木でありました。

ユートランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった森林がありました。しかし、切りとるばかりで手入れをおこたったために、土地は、年を追ってやせおとろえ、ついに、あれはててしまったのです。

これを生かすのは、みぞをほって水をそそぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

ダルガスは、このあれ地に育つ木があるかないか、まず、このことについて研究を重ねました。そこで思いついたのは、ノルウェー産のもみの木でありました。これなら、ユートランドのあれ地にも育つだろうと思って、実際に試験してみると、もみ

の木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。

しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることなく、「自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。」と、熱心に研究を続けました。そうして、かれがふと思いうかべたのは、アルプス産の小もみを移植してみたらどうか、ということでありました。これをノルウェー産のもみの間に植えてみると、両種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたってもかれないで、よくしげりました。ユートランドのあれ野には、年ごとに、みどりの野が廣がりました。ダルガスの希望であり、デンマルクの希望であるこの植林は、みご

とに実現されました。そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、年々高まってきました。しかし、問題はまだのこっています。みどりの野はできたが、ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、その生長は、これによってはたされなかったのであります。デンマルクの農夫たちは、「ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。」といって、かれにせまりました。

ダルガスの長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすきでしたが、かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。わかいダルガスは、父に、

「大もみがある大きさ以上に生長しないのは、きっと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。もし、ある時期になって、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。」といいました。

わかいダルガスの意見を、実際にためしてみると、そのとおりになりました。小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、それをこえると、かえってさまたげになるという、植物学上の事実が、ダルガス親子によって、発見されたのであります。このおかげで、ユートランドのあれ地には、おいしげったもみの林が見られるようになりました。

ダルガス親子の発見と努力によってもたらされた、よい結果

は、木材だけにとどまりません。第一、ユートランドの氣候が、そのよい感化を受けました。しげった木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、ダルガスの植林以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ることがあったのです。

そのころ、ユートランドの農夫のつくった農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわずかのものにすぎませんでしたが、植林が成功してから以後の農業は、すっかりかわりました。夏、しもがおりるのはまったくやみ、こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨーロッパ産の農作物で、できないものはないまでになりました。ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。木材があたえられたうえに、いい氣候があたえられました。そればかりでなく、しげった林は、海

岸からふき送る砂ぼこりをふせぎ、さらに、北海岸特有の砂丘を、海岸近くでくいとめました。

しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が、いたるところに生まれました。土地のねだんがあがって、あるところでは、百五十ばいになりました。道路・鉄道は、いたるところにしかれました。とうとう、ユートランドは生まれかわりました。戰いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあまりあることになりました。

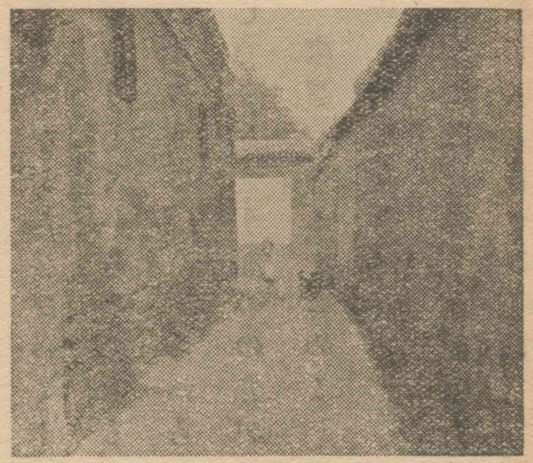
ところが、ここに、木材よりも、農作物よりも、とうといものが生き返りました。それは、全國民のたましいでした。デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、

すっかり生まれかわりました。敗戰のために意氣のおとろえた國民は、希望をとり返し、誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、ついに、今日のような平和國家をうち建てました。

四　ホートン風景

ベービンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。ホートンというのは、小路のことである。

どこの家も、高い土べいを立てめぐらしているので、小路は、おのずから高い土べい続きになっている。あまり廣くもない道



の両がわの土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。それで、ホートンは一本のトンネルのようになって、どこまでもつながっている感じがする。

一見、なんのかわったところもないような、このホートンではあるが、ここに住んでいる子どもたちにとっては、かけがえのない、楽しい遊び場所であり、なつかしい思い出の天地である。

冬は冬で、風あたりの少ないホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを楽しみ、夏は夏で、ひんやりとした

土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

遊ぶといっても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。そのへんを走ったり、地面にこしをおろして、あなをほったり、土でおだんごのようなものをこしらえたり、遠くの方からひびいてくる、いろいろなもの音に、耳をかたむけたりしているのである。

もの音には、いろいろなものがある。まず、もの賣りが鳴らして來る鳴りものの音がおもしろい。

床屋が通る。客のこしかける赤いいすや、せんめん器や、道具を入れた赤いはこを、てんびんぼうでかついでやって來る。かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよ

くしごく。すると、「ビューン」と、あとをひくようなひびきがする。その「ビューン」がとまると、そこでは、どこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

糸屋が來る。荷車をひきながら、ゆっくり歩いて來る。でんでんだいこのような、ブリキのつづみを鳴らしてやって來る。「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。どこからともなく、女の人たちが集まって來て、糸屋さんをとりまく。黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。

いかけ屋が來る。これも、いろいろな道具を入れた荷をかついでいる。前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、その両がわに、ふんどうをつるしておく。歩いて行くと荷がゆれて、しぜ

んにふんどうがどらにあたる。「ボーン」と、かわいらしい音をたてる。

どらにも、大小さまざまあって、音色もちがうし、同じ大きさのどらでも、そのうちかたによって、調子がちがう。「あの音は、おもちゃ屋さんだ」。「いまのは、あめ屋さんだ」と、それぞれ子どもたちにはすぐわかる。

その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって來るのは、さるまわしである。

「ジャン、ジャン、ジャン」

と、はげしくたたいておいて、

てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、「ジャン、ジャン、ジャッ」というように聞える。

これを聞きつけて、子どもが大ぜい集まる。まるく輪になったその中で、さるがさまざまな藝をする。三國志とか、西遊記とかいった、中國のむかしものがたりをやるつもりなのだが、さるは、とちゅうできょとんとしてやめてしまったり、とんでもないべつのことを演じたりする。それが、見ている人には、かえっておもしろい。さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、はやしをいれたりしなければならないので、なかなかいそがしい。

鳴りものをつかわないで、呼び声でやって來る者もある。

まんじゅう屋がそうだ。朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ

歩いて來る。やっと目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

春は、なえ賣りがやって來る。

夏は、きんぎょ賣りがやって來る。「さあさあ、きんぎょをお買いなさい。大きなきんぎょに小さなきんぎょ。」こんなことをいって通る。

アイスクリーム賣りがやって來る。「おいしい、おいしいアイスクリーム。においもさとうも大まけだ。」と歌う。

秋には、なつめ賣りがやって來る。ぶどう賣りもやって來る。たとえ、鳴りものであろうと、呼び声であろうと、トンネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。

このように、いろいろなもの音がひびくが、なんといっても、

いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であろう。水に不便なペーピンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。大きな水おけをのせた一輪車が、「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、かん高いひびきをたてる。だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がひびく。夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。

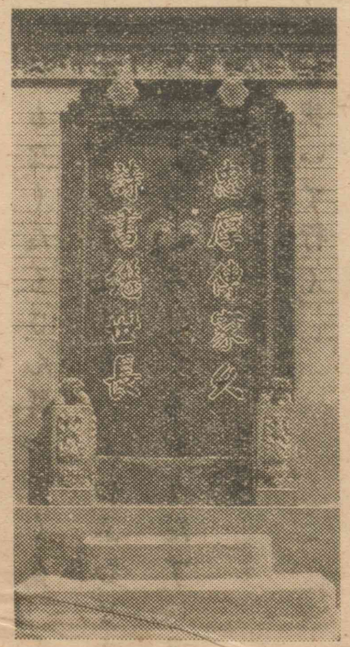
夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。それだけに、空が美しい。月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。青みがかった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、一つ一つがかがやく美しさは、なんといったらよかろう。

ときには、ホートンの廣場などに、かげ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。ほのぼのとゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひきつけてやまない。夜のふけるのも知らないで、見とれてしまう。ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどって行ったりする。

ホートンに面した家々の門には、「れん」が書かれてある。れんは、めでたい文句や、詩の一節であるが、みな、りっぱな文字で書かれてある。小さな子どもは、絵も字もわからないころから、ただ美しいかざりのような氣持で、

れんをながめている。それが、だんだん大きくなって、文字であることがわかり、その文字の意味がわかってくると、いっそうその美しさが胸にきざまれる。文字の國といわれるのも、いわれのないことではない。

正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。子どもたちは、そのあざやかな色どりに、正月氣分を味わう



早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。これは、はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。ふえには大小があ

るから、はとがむれになってとんで來ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音樂である。

中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

やなぎのわたが、どこからともなくたくさん舞ってくる。小さな光ったわたが、土べいのかたすみにたまる。ふわふわとまるくなって、風がふいてくると、ころころところがりだす。子どもたちは、それをつかもうとして追いかける。

大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。

あひるが、「ガア、ガア」とさわいで行く。

花よめ行列のラッパの音が、どこかでひびく。子どもたちは、またそちらの方へ走って行く。

五　電話

人　三郎

ところ　三郎のうちの一室

右がわのかべに、電話がとりつけてある。左手につくえ。

電話のベルが鳴る。だれも出て來ない。一どとぎれて、また鳴りはじめる。

三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで來て、受話器をとる。

三郎「もしもし……そうです。あ、おばさん。だれかと思った……

……え、いま学校から帰ったばかり……おかあさん、配給物を取りに行ったんじゃないでしょうか。げんかんがしまっていたから……はい。え……でも、おばさんだって、このごろちっとも來てくださらないじゃないですか。え、え、はい……そうですか。ほんとう……こんどの日曜ね。（わらって。）いらない。ごちそうなんてたくさん。だから、ほんとうにつれて行ってくださいよ……ええ、一ど、三年のときだったか、遠足で行きました……お客さん、ぼくの知っている人……だれかしら……じらさないでいって……え、おとうさんが、そう……じゃあ、かわってください。（受話器を持ったまま、待っている。その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、樂しそうなようす。）え、おとうさん。ぼ

く、三郎……はい……え……眞ちゃんが……マンシュウの眞ちゃんが、帰って來たんですか……いつ……え、うちに來たんですか……へえ……はい……はい。たいへんだったでしょうね……四十日も……手紙が、はい……二番めのひきだしの……上……はい。（つくえの方をちらちら見る。）今晩……そうですか。あいたいな、早く……はい、四時ね。おかあさんに……はい。早く帰ってくださいね……（わらう。）だれかと思ったんですよ。だって、おばさんたら、お客さんなんておっしゃるんだもの……行ってもいいでしょう……はい、はい。」

三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよ

って、ひきだしをあける。眞ちゃんが書きのこしていった手紙を、とりだして読む。読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

三郎「もしもし、五千二十五番ですか。きょう、マンシュウから來た竹田さん、おいでですか。はい、眞ちゃん……眞二を呼んでいただきたいのです……はい。（電話のかかるのを待っている。その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。）はい。はい、あ、眞ちゃん。ぼく、三郎……うん……よかったなあ。きょう、うちに來たんだって……うん、うん……でもよかったよ。みんなで心配していた……うん、そう……そうだってね。四十日の旅じゃつかれただろう……うん、読んだ。いまここに持っている。なんべん

もくり返して読んだよ。電話番号が書いてあったもんだから……そう……うん、うん……そんなこと……かまわないよ。ぼくのがある。なんでもあるよ。いっしょにつかえばいいよ……うん、氣のどく——そんな、だって、いまどこの家でも二けんぶんも、三げんぶんもの人が、寢とまりしているんだよ。ぼくの学用品を、ぼくひとりでつかうのは、ぜいたくというもんだ。それに、うちはやけなかったから、本だってたくさんある。いっしょに読もう。ああ、リックサックも二つある。そうだ。おばさんがね、こんどの日曜、きみをお客さんにして、ハイキングにつれて行くって……ねえ……（わらって）いいじゃないか。帰ったばかりだから、お客さんさ……うん、うん。それで今晩來るんだろう。六

時ごろ……もっと早くおいでよ。話がうんとある。見せたいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシュウの子どもが。しんせつだね……え、ぼくに……いらないよ。せっかくの記念品だから、とっておいたほうがいいよ……うん、うん……そう、二つあるのならもらうよ……うん……へえ……そんなにしんせつだったの。手紙がだせるようになったら、いっしょに、そのマンシュウの子どもに、お礼の手紙を書こうね……うん、おみやげより、早くきみの顔が見たいよ。きょうはとまるだろう……うん、楽しみにしているよ……おじさんやおばさんによろしく。さようなら。（受話器をおく）

また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

三郎手紙を読みながら、「生きて帰って來ました——か。（顔をあげて、そのことばを味わうように）生きて帰って來ました……」

しばらくして、うらの方で。もの音がする。三郎、それに氣がついて、

三郎「おかあさん、おかあさんなの……（と、うら手に行く……声だけ続く）おかあさん、眞ちゃんが帰って來たんだってね。よかったね。よかったなあ……」

三郎の声が終るころ、しずかにまく。

この「子どもしばい」を
するための注意

しばいは、かならず、ふたり以上の会話から組みたてられています。ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただひとりです。それでは、これはしばいではないかというと、そうではなく、これでも、しばいになっています。ただ、あいてになる人が、見物人の目につかないだけです。そうでしょう。電話のはじめの人は、三郎くんのおばさん、それからおとうさん、そのあとはマンシュウから帰って来た眞二くん、おしまいにおかあさん。ですから、舞台に出ている人は、四人の人と話をしているわけです。

ところが、この四人の声は、見ている人には聞えません。そこ

で、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくてはなりません。そこに、このしばいのむずかしさがあります。三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいっているわけです。ですから、文字にあらわれていないあいてのことばを考えて、それによって、「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。

あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、そうして、三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。

見物人にせなかを向けないように、顔の表情がよく見えるようにすることも、たいせつなことです。

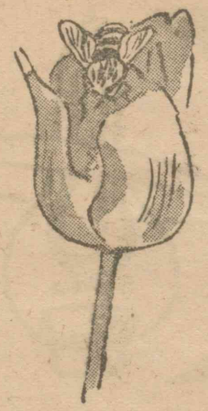
六　そよ風

土

ありが、
ちょうの羽をひいて行く。
ああ、
ヨットのようだ。

チューリップ

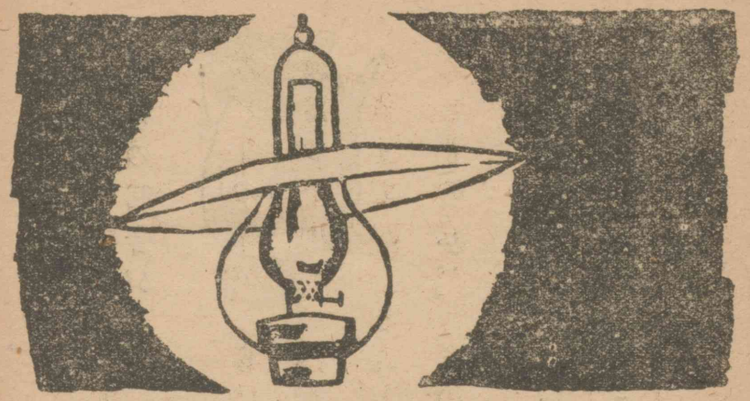
はちの羽音が、



チューリップの花に消える。
そよ風の中にひっそりと、
客をむかえた赤いへや。

しか

午前の森に、しかがすわっている。
そのせなかにその角のかげ。
あぶが一ぴきとんで來る。
はるかな谷川を聞いているその耳もとに。



きり

山の湖水のほとり、
「ます」小屋のランプが、
きゅうに暗くなりました。

短日

かれぎくをたいている。
どやへ追われて行く、白いレグホンたち。

わらいの歌

みどりの森が、喜びの声でわらい、
波だつ小川が、わらいながら走っていく。
空氣までが、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、
みどりの丘が、その声でわらいだす。

牧場が、生き生きしたみどりでわらい、
きりぎりすが、樂しい景色の中でわらう。
メアリとスーザンとエミリとが、
かわいい口をまるくして、ハ・ハ・ハイとわらう。

わたしたちが、さくらんぼと、くるみのごちそうをならべると、
その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。
さあ、元氣でゆかいに、手をつなぎましょう。
うれしいハ・ハ・ハイを、合唱しましょう。

牧場

牧場の泉を、そうじに行って來るよ。
ちょっと落ち葉をかきのけるだけだ。
でも、水がすむまで見ているかもしれない。
すぐ帰って來るんだから、きみも來たまえ。

子うしをつかまえに行って來るよ。
母うしのそばに立ってるんだが、
まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだよ。
すぐ帰って來るんだから、きみも來たまえ。

わたしの心はにじを見るとおどる

わたしの心は、にじを見るとおどる。
おさないころにそうだった。

おとなになってる、いまもそうだ。
やがて老いても、そのように。
そうでなければ、死んでいたい。
おさな子はおとなの父だ。
それで、わたしは望ましい、
わたしの日々が、
自然をしたう心で、
一日一日と、むすばれていくように。

七　ある画像

もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。まだわかい、美しいおかあさんが、まるまるとふとったかわいいあかちゃんをだいていて、その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。

「これは、いまから五百年ほど前に、イタリアのラファエルという画家の

かいたもので、「いすによるマドンナ」といわれています。これを見て、どう思いますか。

ぼくは、その絵を見ると、そのあかちゃんがキリストで、そのおかあさんがマリアだということは、すぐにわかりました。そうして、その絵がだいすきになりました。

その氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりました。それで、すぐに、おとなりのおじさんのところへ行きました。おじさんは、絵かきではありませんが、絵がすきで、それに、わかいころ、世界をまわって來た人です。だから、この絵も、本物をごらんになっているだろうと、思ったからです。

ちょうど、おじさんは、用事がなく、しょさいで、本を読んでいらっしゃいました。

「ああ、よく來たね。なにかおもしろいことでもあるのか。」

そういって、喜んでむかえてくださったので、先生からいただいた絵はがきをだして見せますと、

「それなら、もうすこし大きいのがあるよ。」

といって、一まいの絵をひきだしからだして、見せてくださいました。

ぼくは、絵はがきをそのすりものとくらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。絵はがきでも、たいへ

んいい絵だなと思いましたが、おじさんので見ると、いっそう生き生きとして、その着物やはだの色の美しいのにおどろかされました。

「これでも、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにちがうといってもいいな」。

「そんなにちがうのですか、おじさん」。

「本物はね、いま、イタリアのフロレンスという町の絵画館にかざってあるよ。ラファエルは、ウルビノというところで生まれ、早くから絵のけいこをして、たいへんじょうずであった。が、そのころ、レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケランジェロだのという天才の集まっていた、美術の中心のフロレンスで、研究しているうちに、たいそう上達したのさ。

ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、へき画をかいたり、美しいしょう像などを、たくさんかいた。中でも、ラファエルは、マドンナの像をかくことが得意だった。その「いすによるマドンナ」は、おけのそこにかいたという小さな絵だが、じつによくかけている」。

おじさんは、そういいながら、目を細くして、ありありとその絵を目の前に見るようなようすをなさいました。

「ぼくには、よくわかりませんが、そのマリアは、たいへん美しくて、いかにもおかあさんらしいと思うのです」。

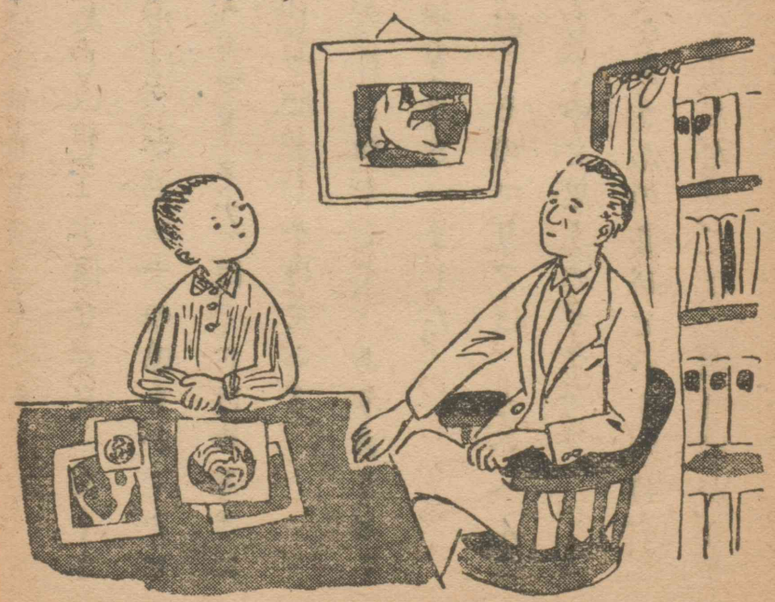
「そう思うかね。いかにも、おかあさんの喜びという心持が、よく出ているね。絵は、写真で見ただけでは、明暗はかなりわかるが、色がわからない。赤いところが黒くなったりする

ので、どうもよくない。色のあるのは、その点はよいが、すりがうまくいかないから、また困る。

「じゃあ、やっぱり、おじさんみたいに、旅行して來なくちゃだめですね。」

「まあ、そうだね。それはそうとして、ラファエルのかいたマドンナのかわったのを見せてあげよう。」

おじさんはそういって、同じ



ひきだしから、一まいえらびだして、見せてくださいました。

「これは、ドレスデンの美術館にある絵で、「シストのマドンナ」といわれている。これはどう思うかね。」

それは、せいの高いマリアがキリストをだいて立っていると、老人のぼうさんらしい人が、その前にひれふしている絵でした。

「その絵は、たいへん感じがちがいますね、おじさん。なんていうか、ただのおかあさんではなくて、キリストのおかあさんという感じが、よく出ているんじゃないでしょうか。」

「ふふん、そう思うかい。きちんとした、おごそかな感じがするね。この絵は、たいへん大きなりっぱな絵だよ。わたしが行ったとき、この絵の前には、一台の長いすがおいてあったが、見物の人が、かわりばんこにやって來て、あいていると

きがなかったよ」。

ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

「あれも、西洋の名画でしょう。ぼくには、そのうまさがよくわからないけれど」。

「ああ、あれか。あれは、ミケランジェロのかいた、てんじょう画の一部だ。くらべてみて、うまさからいうと、ラファエ

ルのほうがうまいかもしれないが、深みやしんけんさは、どうだろう。でも、ラファエルのうまさは、普通の人にもわかるだろうね。なんといっても、二十二か三のわかさで、せんぱいをしのいで大家になり、自由にふでをふるって、りっぱな作品をたくさんのこしたのはえらいよ。こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。きっと先生も、そんなお氣持で、この絵はがきを送ってくださったんだろう」。

市 (25)	償 (17)	焦 (14)	結 (9)	識 (8)
句 (34)	精 (18)	公 (15)	果 (9)	迷 (8)
給 (38)	軍 (18)	牧 (17)	漢 (10)	浅 (8)
番 (39)	復 (19)	鉱 (17)	他 (11)	関 (9)
像 (53)	期 (23)	州 (17)	反 (13)	係 (9)
達 (56)	努 (23)	賠 (17)	紀 (14)	則 (9)

國語　第六学年上
Approved by Ministry of Education
(Date Nov. 17, 1947)

昭和二十二年三月十一日翻刻発行
昭和二十三年一月六日修正印刷
昭和二十三年一月二十日修正発行
(昭和二十二年十一月十七日　文部監検査済)

定價金　円　銭

著作権所有　著作兼発行者　文部省

翻刻発行兼印刷者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者　長　得一

印刷所　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

発行所　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

(昭和二十三年度用第一次発行)

広島大学図書
0130449592